

碩心

社団法人 日本詩吟学院学風会 認可
 神奈川 碩心会 発行

現在会員数 167名
 2年12月地区区計 259名
 逗子山船合大 (473名)

2年12月号 (221号)
 発行 者 萃 岳
 根 編 集 者 愛 岳
 中 村 愛 岳

吟題は教本通りに詠む

漢詩・和歌・俳句

神奈川県本部としては、今までは独自の吟題の詠み方をしていましたが、平成三年一月一日付を以て、すべて教本通りに吟題を詠むことになりました。
 来々早々の審査会には新しい詠み方となります。

(例題)

漢詩：(旧) 香炉峰の雪・白居易
 (新) 香炉峰下新に山居を卜し草堂初めて成る偶東壁に題す。

和歌：(旧) 天和原・阿部仲麻呂
 (新) 唐土にて月を見て詠みける。

俳句：(旧) 俳句 夏草や・芭蕉
 (新) 奥州高館にて。

※和歌とか短歌とかは言わない。
 ※俳句と言わずすぐ吟題に入る。
 ※作者氏名は名前のみを言う。

◎ 審査会のお知らせ

2月10日(日) 皆伝 平塚農業会館
 2月17日(日) 九段以上
 3月24日(日) 碩心会 逗子 図書館ホール
 春期審査会 図書館ホール

碩心会 常任理事会ひらかる

日時 11月8日(休)午後6時30分より
 場所 桜山下会館

(議題)

(1)平成三年度碩心会初吟会の企画

日時 平成3年1月13日(日)10時より

場所 逗子京急ビーチセンター

会費 三千元

招待者 松井岳洋・常盤岳湘・新田岳悠
 岡嶋岳風・安孫子岳晴・鹿嶋岳久

(敬称略)

申込べ切 12月15日(企画部村田方)

当番 一色A支部・吟甫支部
 (11月中旬第一回打合せ)

(2)姉妹会「寒河江吟友会」会員の

来謙に伴う交換会について

11月23日(祭)バス一台にて31人が吟行の目的で来謙、見学ののち「江の島グラントホテル」に宿泊、その場所に於て交換会をした

たいとの申し入れがあり、当会より副部長以上が参加することになった。

(この項については後記掲載)

(3)平成三年度吟行会

地蔵寺木村岳風先生墓参の件

日時 平成3年4月13日(出)14日(日)

コース 逗子Ⅱ八王子ICⅡ諏訪ICⅡ岳

風記念館 霧ヶ峰 白樺湖 別所
温泉泊
別所 小諸 (懐古園・藤村記念館)
輕井沢 高崎 IC 練馬 逗子
会費 約三万円
申込切 11月26日 (企画部村田方)

※碩心会からは左記の方々が合祀されて
います。

故・蒲谷蒼岳 // 根岸清岳 // 佐久間溪
岳 // 竹村梅岳 // 根岸治岳 // 金指萌
岳 // 千葉岳香

◎第99回 全国吟道大会 のお知らせ

日時 平成3年3月17日(日)
場所 明治神宮会館ホール

(一般合吟に男11名女12名参加)

男子:
中村幸岳 白井寿岳 竹石憲岳
千葉劔岳 松野宝岳 秋元梁岳
森田嶺岳 齊田俊岳 清水權岳
網川晃岳 内山俊岳

女子:
杉山雪岳 矢嶋悦岳 緩部秋岳
村田澁岳 石渡桂岳 林真岳
山口夕岳 白井麗岳 大石春岳
佐藤湧岳 黒崎李岳 渡辺秀岳

(右は県本部合吟に合流)

(合吟コンクール)
10名一組により松井教場から出吟します。
(連吟コンクール)
県本部から3人一組の連吟コンクールに
(男1・女2)の二組が参加、その中に松
井正風氏出吟。

◎第17回 全国選抜者吟道大会

日時 平成3年7月15日(日)
場所 明治神宮会館ホール

※右大会には左記予選会を通過された
方が出吟。

地区予選会について

(1)碩心会予選会

日時 平成3年1月29日(火)
場所 六代御前社務所

※15人~20人を対象にその中から選出。
※出吟希望者は1月25日迄に根岸会長
迄申し出て下さい。

※右予選通過者は左記に。

(2)神奈川予選会 (県本部・聖吟・さがみ)

日時 平成3年3月10日(日)
場所 平塚農業会館

予選通過 漢詩22人・和歌22人(計44人)
※右予選通過者は下記に。

(3)関東ブロック予選会
日時 平成3年4月29日(日)
場所 パンセホール (旧労音会館)
予選通過 漢詩18人・和歌17人(計35人)
※右予選を通過された方が前記本大会
に出吟となります。

※又この時点で努力賞が漢詩9人・和
歌9人(計18人)に出ます。

全国選抜者大会の吟題

(漢詩5題)

- 1、不識庵機山を撃つの図に題す 1/29
 - 2、大桶公 1/42
 - 3、磯浜望洋楼に登る 1/47
 - 4、楓橋夜泊 1/103
 - 5、桶狭間を過ぐ 5/5
- (和歌5題)
- 6、唐土もろこしにて月を見て詠みける 明/22
 - 7、夏月なつづきをよめる 明/32
 - 8、伊豆の海 明/44
 - 9、富士 明/64
 - 10、春 明/90
- ※和歌の吟題は前記のように教本通り
詠むことになりました。

頌心会 大船地区吟道温習会 御礼と私感

大船地区長 木村松岳

去る11月18日(日)右会が戸塚の中小企業労働研修センター四階のホールで行われ、二百余名の参加により、盛大に行われましたことは、偏えに各地区会員皆様の絶大なる御協力の賜ものと心から感謝しております。御賛吟、詩舞にと御参加の皆様、誠にありがとうございました。

定刻9時30分修礼、開会のことは岩崎恵岳、頌心会の詩を先導鈴木萃岳により大合吟のあと、第一部大船地区吟詠に入り、そのあと協賛吟詠、許証授与、立体吟、役員吟詠と進み、15時5分滞りなく無事終了しました。当日はあいにく松井岳洋先生、根岸会長の欠席により、加藤岳相副会長の御挨拶をいただき有難うございました。

不慣れの私に、前地区長さんはじめ、諸先生方、並びに会員各位の御協力を得て、温習会が無事終了いたしましたこと深く感謝いたしております。又プロに一部ミスがあったことお詫び申し上げます。

大会に臨み私感をひと言

私達は誰でも興奮しやすいものです。自分の番になると、口中や咽喉がとてゝ渴き

ますので、壇上へ立つ前に水を飲んだり、トローチなどをなめたりします。それでも渴きはとまりません。口中や咽喉が渴くというのは興奮のために、腺の分泌が抑制されるからです。井戸水の水が出ていくくなっているのと同じで、水がないわけではありませんが。そのためには環境(場所)に対する精神的な抵抗力を強めることです。ありのままの力、自分なりの詩吟をやるうといり、純粹な気持ちで臨めば、落ちついて吟ずることが出来ると思います。私はいざ出番となったとき、その直前には必ず「吟じ出し」の高さを入念に調整しています。それでもなかなかうまくは出来ません。参考までにひと言。

姉妹会

寒河江吟友会と 交流

交流

去る11月23日(日)寒河江吟友会々員の皆様31名が、バス一台にて、吟行会の目的で鎌倉見物にこられました。そしてその夜、宿泊先の江の島グランドホテルに於て、交流会をもち、わが頌心会からは副部長以上の中から23名が参加いたしました。

寒河江吟友会とは、去る60年6月、頌心

会が山形吟行会を行った折、人情あふるるお出迎えをうけ、又色々とお優待いただき、参加者全員が感謝感激、あの時のことはいつまでも忘れられません。それが御縁で60年9月1日付を以て「姉妹会」となりました。

そのようなことで今回先方様より来鑑の御連絡をうけ、当頌心会としては、あの時の温情にお応えしなくてはと、常任理事会にて話し合いの結果、企画部のお骨折りにより、今回の取運びとなりました。

残念なことに会長高橋庄岳先生が、病気のため、急拠来られなくなり、まことに残念でしたが、懐しい竹永先生他の皆様にお会いでき、本当に嬉しく思いました。今回も何かとお心遣いいただき、東北の手づくりの美味しい漬物、りんご等をいただき、又々その人情の深さにあらためて感謝いたしました。又一人々々にばらの花束をいただき、その心のもったばらの花は、十日以上も咲きつづけてくれて、寒河江の皆様を思い出させてくれました。

和やかな雰囲気の中、詩吟、詩舞の交換が行われ、楽しいひとときを過ぎました。今回も却って色々御心遣いをいただき、恐縮しております。これを機に、両会の友好と、益々の発展を祈ります。

練吟 メモ 詩吟の略歴

○詩吟の歴史を述べる前に、用語について触れておきたい。漢詩を吟ずることを一般に詩吟と称しているが、詩吟界では単に「吟」とか「吟ずる」とかである。ほかに「吟詠」や「朗詠」が使われているが、流派によって違いがあるようだ。漢詩や和歌（短歌）である場合は「吟詠」、その他の詩型（長歌・今様・俳句・新体詩・翻訳詩・現代詩・散文詩）の場合は、「朗詠」と称している。（岳風会は和歌は朗詠という）

○詩歌を吟ずる風習は奈良時代からあった。中国から漢詩文や雅楽器が伝来したころ、当時の漢詩は訓読でなく、中国の楽府にならって中国音で吟じられた。それは詠とか囀（さえすり）という言葉があったことで推測できる。漢詩を中国音のまま吟ずると鳥のさえすりに似ているからである。

○平安時代中期ころには詠や囀はなくなり、雅楽もよりやく日本のものに改良され、それにもなつて和歌を歌詞とする宮廷楽の声楽として「朗詠」が行われるようになった。その名残りが現在も正月に宮中で行われる「お歌始め」であるが、これは、和歌を読み上げる「披講」（俳句にも披講あり）であつて、朗詠とは違うものである。

○江戸時代中ごろになつて、儒学や国学が盛んになると、その波に乗つて漢詩を学ぶ者の間に吟を楽しむ人達も出てきた。とくに、江戸時代後期には武士間に詩吟が大いに称揚されるようになった。当時の流派では九州豊後（大分県）の広瀬淡窓の咸宜園（かんぎえん）流、肥後（熊本県）の時習館流、久坂玄瑞の久坂流が著名であつたが、江戸では湯島の聖堂流が知られている。

○明治以後では、西歐文化の流入に伴い、右の諸流派は衰微し、一般には剣舞の流行と相まつて詩吟が盛んとなり、一方、筑前琵琶や薩摩琵琶の隆盛に応じて、いわゆる悲憤慷慨調の詩歌の吟詠が喜ばれた。大正以後は錦心流琵琶と結びついて優雅艶麗なものも現れたが、昭和に入ると木村岳風先生により現在の吟詠界の方向が確立された。

○以上が詩吟の略歴であるが、留意を要することがある。戦後近代琵琶の各流から転向した女流詩吟家が現れ、芸術的な要素が強くなりそれに伴い音楽的には進歩した。流派によつては三曲楽器ないし洋楽器を用いるが、詩吟も声楽の一部に仲間入りしたようである。因みに、岳風会は楽器の使用は歓迎していないが、楽器に合わない詩吟は声楽の範囲には入らないとされている。

アルコール中毒詩人・李白

碩心会指導者講習会の折、杜甫作「飲中八仙歌」を勉強、そして自分の勉強も兼ねて、お弟子さんにも指導することにした。

唐の時代は最も詩が盛んであつたといわれるが、その中で李白と杜甫が最高峰といわれ、この二人は同時代に生きて相互に交わりがあり、杜甫は「飲中八仙歌」の酒家八詩人の中で李白を次のように詠んでいる。

李白一斗詩百篇
長安市上酒家眠
天子呼来れども船に上らず
自ら称す臣は是れ酒中の仙なりと

審査課題の一つである白楽天の「香炉峰の雪」と、同じく香炉峰を呼んだ李白の「廬山瀑布を望む」を比べてみると、そのスケールの大きさにしても全く違い、李白は豪快にして破天荒で、古今独歩であつたことが分るような気がする。

愛岳

24 秋元梁岳・堀内支部より上山口支部へ
(入会)

598 吉田ティ(高)横浜市泉区白百合町一―五
(大船B) (電)〇四五―八―一―三―八―七

549 荒井 勇(長柄) 554 滝口良子(唐木山)
(退会)